



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第六八号）

寒露 かんろ

十月八日

月



十五夜のお月見が終わると、秋も一層深まりを見せます。秋という豊かな実りのイメージがありますが、どこかもの悲しい思いがするのも事実です。

月みれば ちぢに物こそ かなしけれ

わが身ひとつの 秋にはあらねど

『古今和歌集』 大江千里 おほえのちさと

（月を見れば、いろいろと思いが湧いて来て、悲しいことだ。自分だけが秋を迎えたわけではないけれど）

宗教学者の山折哲雄さんは、この和歌のように、月そのものが哀しいわけではなく、月を眺めていると自ずから物思いにふけるといふ文化的伝統があるのかもしれないと著書で指摘しています。日本人の細やかな精神は、四季折々の風物を見て育まれてきましたが、ことにも悲しさは美しい秋の月があつてのことでしょう。

そういえば、月見に欠かせないススキに、二つの漢字があるのをご存知でしょうか。「薄」と「芒」です。近頃知ったのですが、夏には「薄」、秋には「芒」と使い分け、さらに穂が出たものは、動物の尾に似ていることから「尾花」というそうです。ススキは萱葺き屋根を葺く萱にも使われてきて、日本人には馴染み深い草ではありますが、その観察力のするどさには驚くばかりです。

十五夜の次は、旧暦九月十三日の十三夜の月見を迎えます。十五夜は中国の風習が伝わったものですが、十三夜は「のちの月見」と呼ばれ、二度、月を愛でるといふ日本独自のもの。「のちの」といふ言葉が美しい響きです。今年十月三十日。日本の秋ほど、日本人の感性が刺激される季節はありません。

文 千種清美